

第2節 田小屋野貝塚の重要性

斉藤慶史（青森県教育庁文化財保護課）

はじめに

田小屋野貝塚は、青森県つがる市木造館岡字田小屋野に所在する縄文時代前期から中期にかけての遺跡である。本遺跡は、亀ヶ岡遺跡の北方約 200m の舌状台地上に立地しており、貝塚の他に竪穴建物跡、貯蔵穴、土坑墓、盛土が検出されている。本節は、『田小屋野貝塚総括報告書』（つがる市教育委員会 2016）でふれられなかった本遺跡の重要性について、地域的な枠組みを広く俯瞰的に捉え、遺跡の歴史的・学術的価値の観点から総括をおこなうものである。

1. 縄文時代貝塚研究史上の重要遺跡

明治時代以降、各地の研究者が田小屋野貝塚を訪れ、発掘調査を行っている。明治 29 年に佐藤傳蔵は田小屋野貝塚の調査を行い、ローム層中から大量の土器や石器が出土したことを記載している（佐藤 1896）。報文では、隣接する亀ヶ岡遺跡との対照的なあり方に注目し、特に遺跡の年代については、亀ヶ岡遺跡よりも古い時期のものと推測し、ローム層が洪積世の年代となることから、出土した土器や石器が洪積世末に遡る可能性に言及している。ただ、ヨーロッパで当時発見されていた洪積世人類遺跡では土器や磨製石斧が伴わないことなど、出土遺物の内容に隔たりが大きく、国内でも同様の土層状況を示す遺跡が乏しいことから、「洪積期の遺跡と断言できるものではない」とも述べている。このローム層とは平成 24 年度 B トレンチ周辺で検出されていた縄文時代中期の盛土遺構をさすものと推察されるが、亀ヶ岡遺跡と対比する形で、遺跡形成過程にも注意が払われていた点は注目される。

大正から昭和初期にかけて、山内清男らによる縄文土器の型式編年研究が開始され、基準資料の整備が進められていく。五所川原市オセドウ遺跡や八戸市一王寺遺跡など、本県の貝塚もこうした研究の舞台となり、田小屋野貝塚では、大正 14 年に山内清男が踏査を行い、昭和 3 年には、中谷治宇二郎が発掘調査を実施している。それぞれの調査報告には遺跡から円筒土器が出土したことが記載されているが、貝塚や遺構の内容にはふれられていない（山内 1929、中谷 1929、清野 1969）。これらの調査は田小屋野貝塚に近在する五所川原市オセドウ遺跡での人骨発見に端を発する形質人類学者の調査動向との関係性がうかがえ、当時の貝塚調査で人骨資料の獲得が主たる目的となっていた様子がうかがえる。こうした一連の調査研究成果と地域の著名な遺跡という点が評価され、昭和 19 年には隣接する亀ヶ岡遺跡とともに史跡指定を受けている。

その後、平成 2・3 年には青森県立郷土館がヤマトシジミの貝塚を伴う竪穴建物跡の調査を行い、ベンケイガイ製の貝輪や北海道産黒耀石、クジラの骨などが出土した。縄文時代前期の津軽地方の狩猟・漁撈・採集のあり方とともに津軽海峡を越えた交流の様相が明らかとなった。また、平成 20～27 年にかけてつがる市教育委員会が指定地内とその周辺を対象に断続的に確認調査を行い、縄文時代前期中葉から中期末葉にかけての遺構の変遷を把握するに至った。

このように、100 年以上にわたる長い調査研究の歴史をもち、多くの先学が貝塚研究上の諸課題の解明に取り組む契機をなした本遺跡は、地域の考古学史を考究する上でも価値の高い遺跡といえる。

2. 資源利用の実態を伝える遺跡

貝塚からは動物の骨や貝を加工した骨角貝製品、狩猟や漁撈・採集を通じて獲得された哺乳類・鳥類・魚類の骨、貝殻等が豊富に出土するが、いずれも当時の生業や資源利用の実態を明らかにする上で欠くことのできない情報源である。田小屋野貝塚には、ヤマトシジミを主体とする縄文時代前期中葉と中期初頭の 2 時期の貝塚が検出されており、青森県立郷土館とつがる市教育委員会の発掘調査から、前期中葉の貝層に含まれる動物遺存体の組成が明らかにされている（青森県立郷土館 1995、つが

る市教育委員会 2016)。

前期中葉の貝塚から出土した動物遺存体は、大きくわけて貝類・魚類・鳥類・哺乳類で構成される。貝類は汽水性のヤマトシジミが9割以上を占め、淡水性のイシガイがこれに次ぐ。淡水性のオオタニシ・マルタニシ・カラスガイも少量みられ、鹹水性のハマグリ・サルボウ類・マガキなども破片の状態で微量確認されている。全体としては汽水性のヤマトシジミが圧倒的に多く、それらは小河川の河口部か汽水の入る沼で採集されたものと推測される。

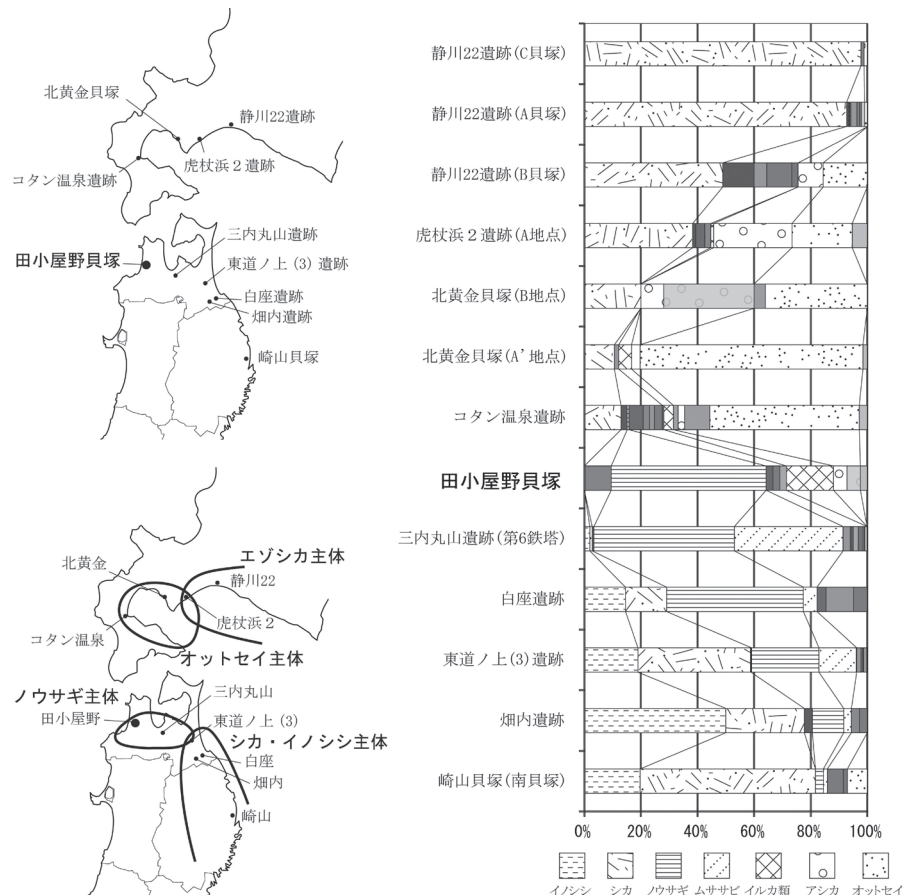
魚類はコイ科とサバ属が最も多く、ニシン科・スズキ属・サケ属・ブリ属・ウミタナゴ科・ソウダガツオ属も普通にみられる。淡水～汽水性のコイ科と外洋性表層回遊魚のサバ属・ニシン科・ブリ属・ソウダガツオ属が大半を占め、これに若干の沿岸性魚類であるスズキ属・ウミタナゴ科と遡河性のサケ属が加わる構成である。この中で大型の個体としてはスズキ属やサケ属、一部のコイ科などがあり、特にスズキ属とサケ属は中～大型個体によって占められる。また、冷水系の魚種として、サケ属・マダラ・ニシンが含まれるが、基本的には暖流系の魚種で占められている。これについては、貝塚形成時における対馬暖流の卓越した海況を反映したものと考えられる(小泉 1987)。

鳥類はガン・カモ類が最も多く、アホウドリ・ハクチョウ・カイツブリなどもみられる。アホウドリは夏季に飛来した個体を、ハクチョウやカモ類は冬季に越冬のため南下した個体を捕らえたものと考えられる。両種の生態的特徴から、夏・冬の両時季に鳥猟が行われていた様子がうかがえ、魚類の季節性とあわせると年間通した生業活動の痕跡をみることができる。

哺乳類はノウサギが最も多く、クジラやイルカ、トド、アシカなどの海獣類も目立つ。大型陸獣はわずかにカモシカが確認されたのみで、縄文時代の貝塚から多く出土するシカ・イノシシは出土していない。青森県内の同時

期の貝塚と比較すると、八戸市から小川原湖周辺の太平洋沿岸地域には、シカやイノシシが出土獣骨の半数以上を占める貝塚が多くみられ、日本海側と太平洋側で対照的なあり方が示されている(斉藤 2012)。

ノウサギが多い点に関しては、三内丸山遺跡にも同様の傾向がみられるが、海獣類の比率の面においては、三内丸山遺跡と異なり、田小屋野貝塚でやや多くなっている。海獣類については、伊達市北黄金貝塚や八雲町コタン温泉遺跡など、北海道南部の貝塚でオットセイが半数以上を占める遺跡が存在するが、田小屋野貝塚では



図付8 東北地方北部から北海道南部の獣骨組成

陸獣類の比率が半数以上となり、大きく様相が異なる。また、本州日本海側の同時期の貝塚と比較すると、大型陸獣の少ない遺跡は北陸地方から青森県西部にかけて連続しており、多雪地域の特徴との指摘もなされている（長谷川 2006）。一定程度地理的な連続性の中で漸移的に比率が変動する傾向があり、広く地域的な傾向を押さえた中では、それぞれの遺跡において特有の構成をみることができる（図付 8）。

この他に遺跡内からはオニグルミやクリなどの炭化種実が出土しており、コナラ節やクリなどの炭化材も検出されている。これらは、食料として利用された堅果類や燃焼材・建築材として利用された樹種の内容を示すとともに、集落の周辺に落葉広葉樹を主体とする森林が広がっていたことを示すものである。また、植物質食料の評価をめぐっては、出土人骨の炭素・窒素同位体分析結果も重要である。A-5 号遺構から出土した壮年期後半から熟年期と推定される女性人骨の分析結果によると、生前の食生活は魚類とともに堅果類やイモ類などの C3 植物をかなりの割合で摂取するものであったと推測されている。

このように、田小屋野貝塚から出土した多種多様な動植物遺存体は、本州北部に展開した多様な資源環境下で、利用可能な食料資源を巧みに組み合わせていた縄文時代の生業の特徴を具体的に示すものである。また、縄文時代前期中葉と中期初頭の貝塚から出土した動植物遺存体の比較分析を行うことで、縄文海進最盛期以後の古十三湖に生じた環境変動に対して、人々がどのように適応していったのかが具体的に把握できる遺跡といえる。

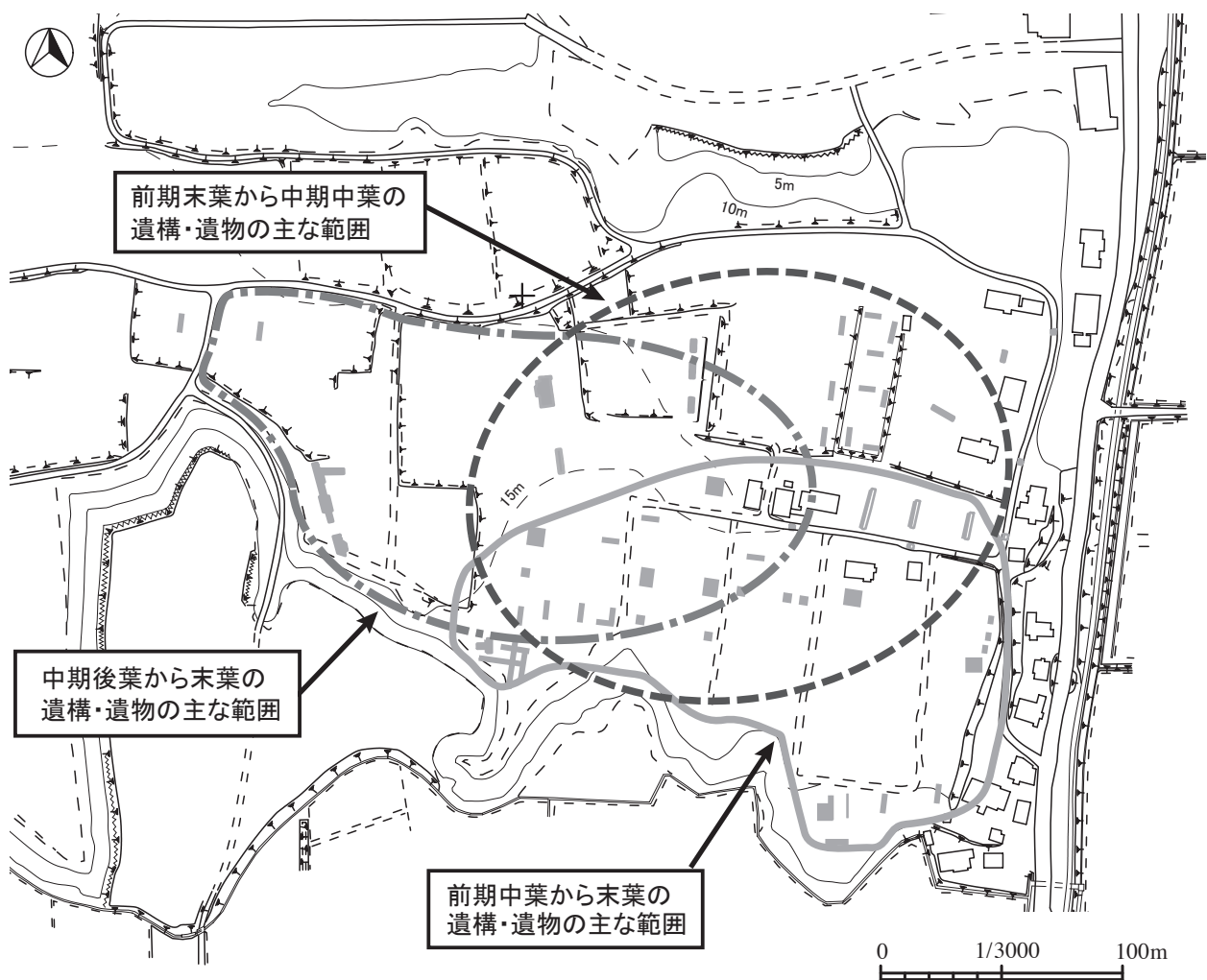
3. 日本海側に立地する希少な貝塚集落

出土遺物の内容と遺構の時期から、田小屋野貝塚では前期中葉から中期末葉に至るまで、約 1,700 年間にわたる居住の痕跡が認められる。遺構は東西に細長く延びる丘陵のほぼ全域に広がり、つがる市教育委員会が実施した内容確認調査から東西 350m、南北 200m の範囲に及ぶことが明らかとなった。貝塚の他に 22 棟に及ぶ竪穴建物跡、貯蔵穴や盛土、土坑墓等がみられ、居住・貯蔵・廃棄・埋葬といった集落の構成要素が確認されている。

貝塚はいわゆる地点貝塚で、廃絶後の竪穴建物内部に貝層が堆積したものである。平成 24 年度調査の B-1 号遺構では、下層から前期中葉、上層から中期初頭の複数時期にわたる貝層が重層して検出されている。縄文時代前期から中期にかけての生活の様子を示す多種多様な遺物が出土しており、特に貝塚からは骨角貝製品と動物遺存体が良好な状態で検出されている。中でも約 60 点におよぶベンケイガイ製貝輪の破片は、製作残滓や加工途中での失敗品と考えられるもので、完成品は 1 点も確認されていない。このため、本遺跡は貝輪生産に関わる遺跡であり、直接的な素材入手が困難な内陸や北海道の集落へと完成品を供給していた様子が推測されている（福田 1995）。また、本遺跡出土の黒耀石には在地の出来島産黒耀石の他に北海道（豊泉・赤井川・白滝）産黒耀石が含まれており、津軽海峡を越えた交流・交易の存在が明らかとなっている。これらの要素は、物資の流通拠点ともなった本集落の性格の一端を示すものとして重要である。

土坑墓からは人骨が出土しており、葬制や社会に接近する情報も得られている。平成 24 年度調査の A-5 号遺構出土人骨については、形質鑑定や炭素窒素同位体比分析による食性解析が行われ、集落に暮らした人々の身体的特徴や食生態が復元されている。

また、これまでの内容確認調査から集落中心部の時期変遷の概略が明らかにされている。前期中葉に遺跡南側において居住がはじまり、前期末葉まで中心的な居住空間として維持される。その後、前期末葉から中期中葉にかけて北側へと居住域は移動し、中期中葉から末葉にはさらに西側へと移動し、終焉を迎えている（図付 9）。



図付 9 居住域の時期変遷

このように、縄文時代前期から中期にかけての生産と居住様式の変化を単一の遺跡から分析できる遺跡は東北地方北部を広く見渡しても青森市三内丸山遺跡や七戸町二ツ森貝塚などごく少数の遺跡に限られており、田小屋野貝塚は津軽地域を代表する拠点集落の一つに数えられる。また、縄文時代の貝塚はその多くが太平洋側に立地しており、日本海側に立地するものは少ない（樋泉 2007：図付 10）。現在、国指定史跡の貝塚 68 遺跡のうち、日本海側に立地するものは田小屋野貝塚を含めても、朝日貝塚（富山県）、上山田貝塚（富山県）、佐多・講武貝塚（島根県）のわずか 4 遺跡にすぎない。本遺跡は、東北地方北部日本海側の地域における貝塚を伴う集落としては最大級の規模を有するもので、全国的にも希少な存在といえる。



図付 10 列島の貝塚分布図
（樋泉 2007 を一部改変）

おわりに

以上の諸点を勘案すると、田小屋野貝塚は東北地方北部日本海側に立地する汽水性貝塚を保有する拠点集落として希少な存在であり、縄文海進の大きな環境変動のもと、人々が環境に適応し、定住した証拠を示す重要な遺跡である。我が国の歴史を語るうえで欠くことのできない遺跡であることから、平成 29 年 10 月には既指定地の西側 43,000 m²が新たに追加指定を受けた。

最後に今後の課題を示す。現状では指定地内に未調査区域が多く存在し、第 3 項にあげた集落の変遷観については遺構の配置に関する十分な情報が得られていない。そのため、今後も集落全体像の解明に向けた確認調査を計画的に実施していく必要がある。また、平成 29 年の史跡追加指定により、指定範囲が大幅に拡大したことを受けて、今後は指定地全体に係る「保存活用計画」の策定を行う必要がある。その上で、隣接する亀ヶ岡遺跡とともに史跡整備の進め方が検討されていくことが望まれる。

引用・参考文献

- 青森県立郷土館 1995 『木造町田小屋野貝塚 ―岩木川流域の縄文前期の貝塚発掘調査報告書―』
青森県立郷土館調査報告第 35 集 考古-10
- 清野謙次 1969 『日本貝塚の研究』 岩波書店
- 小泉 格 1987 「完新世における対馬暖流の脈動」 『第四紀研究』 26-1
- 斉藤慶吏 2012 「貝塚出土獣骨からみた円筒土器文化圏内における狩猟活動の地域性」 『博古研究』 44
- 佐藤傳蔵 1896 「壙塚層中石器時代の遺物」 『東京人類学会雑誌』 12-127
- つがる市教育委員会 2016 『田小屋野貝塚 総括報告書』 つがる市遺跡調査報告書 9
- 樋泉岳二 2007 「貝塚―狩猟と漁撈」 『日本の考古学 上巻 ―ドイツ展記念概説―』 学生社
- 中谷治宇二郎 1929 「東北地方石器時代遺跡調査豫報」 『人類学雑誌』 44-3
- 長谷川 豊 2006 「縄文時代の多雪地域におけるシカ猟・イノシシ猟 ―東北・北陸の資料集成とその基礎的検討―」 『往還する考古学 近江貝塚研究会論集 3』
- 福田友之 1995 「北日本におけるベンケイガイ交易 ―津軽海峡を渡った貝輪―」 『北海道考古学』 31
- 山内清男 1929 「関東北に於ける繊維土器」 『史前学雑誌』 1-2